

飛鳥・奈良時代、「いしばし、いわはし(石橋)」と呼ばれた橋は、石で造った橋のことではなく、“川を渡るために置き並べた石、飛び石”のことでした。

(木の板を渡した橋は「打橋うちはし」と言い、川幅が広い場合は「継ぎ橋」、船を並べて板を渡した橋は「浮き橋、船橋」と呼ばれた。)

万葉集には、この「石橋」を詠んだ歌が7首あります。他に、「石橋」を連想させる歌も数首あります。「橋」を詠んだ歌の中では、「石橋」が最も多いのです。

そして、歌に詠まれた「石橋」には、“人の往来のための交通設備”としての役割を越えるものが存る、と感じます。

そこで、万葉の歌における「石橋」の意義を、詠み人たちの「石橋」に対する感覚や心情を通して、探って見ました。

橋は、元々、“隔てているものを繋ぐためのもの、人が通るためのもの”であり、そこから、人々が、“男女間の恋愛や、当時の通い婚・妻問い婚”と関連して意識するのは自然のことです。

「七夕(彦星と織女の逢瀬)の歌群」(巻十・秋雑歌)や、紀伊の妹背山の歌(巻7・1193)に、「打橋」が詠まれます。大伴家持も、七夕の歌で、二人のために橋を渡したいと歌います。(巻20・4310、ここでは「石並み」)

その中で、「石橋」については、殆どの歌が、“妻問いすること”自体を意識して、詠まれていることが特徴的に見られます。

ほぼ作歌時期の古い順に、7首の歌について観察します。

歌の作者は、柿本人麻呂と笠女郎かさのいらつめの歌、この2首を除いて、総て不明です。(人々に広く歌われていたものを、誰かが少し整えた、そんな歌と見られる。)

人麻呂の“明日香皇女の殯もがりの時の挽歌”(天智天皇の娘・藤原京時代)において、「石橋」と「打橋」の設置場所の様子を想像することができます。

「飛ぶ鳥 明日香の川の 上つ瀬に 石橋渡す 一には「石並み」といふ 下つ瀬に 打橋渡す ……」(巻2-196)

(明日香川の上流の瀬には、石橋が渡されている。下流の瀬には、打橋を渡している、…(その後、石橋に玉藻、打橋には川藻が、生え靡いている、と詠う))

○更に続く詞から、石橋は上流の浅瀬に、打橋は下流の早瀬に、設けてあったことが分ります。

周囲を山に囲まれた大和盆地には、山裾の村々に小川があり、この様な小さな橋が幾つも在る。そんな風景が、あちこちに見られたと想像されます。(P.4に写真)

大和の国に古くから伝わる長歌謡を集めた「巻十三・相聞」にある歌の一つ

「直ただに来ず こゆ巨勢道こせじから 石橋踏み

なづみぞ我が来し 恋ひてすべなみ」(巻13—3257)

(まっすぐ来ないで、こっちからお越こしし と言うその巨勢の道から、石橋を踏み
難儀しながらやって来ました。恋しさのあまりどうしようもなくて。)

○あなたを思い、はるばる遠くから川を渡り足を濡らすなどしてやって来たのです、
と、巨勢路に譬えて必死の気持ちを訴えています。

(「巨勢路」は、紀伊国に向かう長い道のり。御所市古瀬を通る。傍を、曾我川が流れる。)

「巻七・人麻呂歌集にある旋頭歌」古歌の一つ

「はしたての 倉橋川くらはしがわの 石の橋はも

男盛おとこざかりに 我が渡してし 石の橋はも」(巻7—1283)

(倉橋川の石橋はどうなったかなあ。若い盛りに、私が渡した石の橋は、どうなっ
ているかな。)

(「はしたて」は梯はしごの意味で「倉」掛かる枕詞。「倉橋川」は、
桜井市倉橋を流れる寺川のこと。この地には、6世紀末には崇峻天皇の宮が在った。)

○倉橋を詠んだ前後の歌から、その橋は“彼女のもとへ通った橋”であったと分か
ります。自ら重い石を運んで石橋を据えていたのです。

「巻十・秋相聞・花に寄す歌」の一つ

「石橋の 間々まざままに生おひたる かほ花の 花にしありけり ありつつ見れば」

(巻10—2288)

(石橋の石のそこここに生えているかほ花のように、ただの綺麗な花に過ぎなかつ
たよ。)

(「かほ花」はカキツバタとも。ここではあだ花)

○美女ではあったが、その女の不実な態度に落胆しているようです。「石橋」の詞で
“渡って通った”ことを暗示させ、もう行くのは止めようとの決心を詠っています

「巻七・雑歌・故郷を思ふ歌」の一つ

「年月としつきも いまだ経へなくに 明日香川 瀬々せせゆ渡しし 石橋もなし」

(巻7—1126)

(年月もまだそれ程も経っていないのに、明日香川のあちこちの瀬に渡しておいた
石橋は、もう無くなっている。)

○故郷の明日香の村を離れ、久しぶりに戻って来た男が、かつて渡した石橋が、無く
なっているのを惜しんでいます。先の歌「倉橋川の石橋」も、同様だったでしょう。
石橋は、放っておくと川の増水や激流で流されてしまいます。

○石橋が無くなる理由は、これらの歌のように、その地を離れた故というだけではあ
りません。当時の婚姻形態に関係していると見られます。

「通い婚、妻問い婚(男が通う場合が多い)」とは言え、これは若い頃の一時期のことでした。「かほ花の歌」のように、結婚には至らないこともあります。

多くの場合、結婚が親に認められ、生まれた子供が少し大きくなる頃には、新たに家を建てて共に暮します。妻問いのための石橋は、使われなくなります。

(男の親または女の親の、家の地所の内に建てても、親と同居するわけではない。これは、庶民についても同様。国の律令制度のもとでは、口分田や出挙(稲の貸付)も、家単位・家族単位ではなく、男・女に個人単位で与えられる。夫婦に扶養の義務はなく、三か月以上妻問いが無いと、離縁とみなされる。尚、山上憶良作の「貧窮問答歌」(巻5・892)に見られる三世代同居は、特殊な例、と言われる。)

石橋は、“長年月変わらずに、同じ所に在る橋”ではなく、それ故、人の心に残るものであったと見られます。

「巻十一・古今相聞往来・寄物陳思・川に寄す歌」の一つ

「明日香川 明日も渡らん 石橋の 遠き心は 思ほえぬかも」

(巻11-2701)

(あの明日香川、明日にでも渡って逢いに行こう。その石橋の飛び石のように離れ離れの遠く隔てた気持ちなど抱いたことはないのです。)

○「石橋」の詞で、“石の間隔が離れている”意味とし、“遠き”を修飾させています。

ところが、奈良時代中期に、

笠郎女が“大伴家持に贈った歌二十四首”の中の一首では、

「うつせみの 人目を繁しげみ 石橋の 間近き君に 恋ひわたるかも」

(巻4・相聞—597)

(世間の人目が多いので、それをはばかり、石橋の石の間ほどの近くにおられるあなたに、逢うこともなく恋つづけているのです。)

○「石橋」の詞で、“石の間隔が近い”意味とし、“間近き”を修飾させています。

○両者は、「石橋」を、正反対の感覚で捉えています。

自ら据えた石に足を滑らせても渡って行こうと決意する男と、未まだか未かと待ちつつ石橋を思い浮かべるだけの女との、感じ方の違いが見えます。

○都人みやこびとであり、歌人でもある笠郎女は、石橋そのものを詠んではいません。

以前に歌われた「石橋」から得た心象を、「枕詞」に成して、「恋心」を詠います。

尚、「いしばし・いわはし」は、歌の原文(万葉仮名)では、「石走」の文字で記されることが多いのです。(人麻呂の挽歌と3257番歌は、「石橋」)

「走る」は、“速足で行く、急いで向かう”ことです。「いしばし」を渡る男の気持ちを歌うには、「石走」の方が、ふさわしいと見ていたかと思えます。

万葉の人々が歌に詠み、意味付けた「石橋」とは、「若い頃に踏み締める、恋の通り路」であり「自らの手で、自分のために渡す橋」であった、と推察しました。

言い換えれば、「石橋」は、「自ら拓ひらく恋の道」を象徴し、それを若者に提示するものであった、と言えます。

主な参考文献

- ・伊藤博 「萬葉集・釋注」 集英社
- ・井手至・毛利正守 「新校注・萬葉集」 和泉書院
- ・青木真知子 「橋の歌—万葉集を中心に」 星稜論苑第36号
- ・義江明子 「古代女性史への招待」『婚姻と家族・親族』 吉川弘文館
- ・関口裕子 「日本古代家族史の研究」「日本古代女性史の研究」 塙書房



「飛鳥川の『飛び石(石橋)』@明日香村」より、転写した写真



「打橋」を偲ばせる、少し下流にある板の橋